春の日

一、二　廣田　T　H

祈ることなき身なれともかにかくに額つきにけり御佛のまへ。
あたゝかき春の日照りて江戸川はうす藍色に光るなりけり。
江戸川のよもきの中に見出てたるたんぽゝの花紫の花。
思はざるものに逢ひたる心地して寸ばかりなるたんぽゝ愛でぬ。
同じくは雲雀の如く遊ばんと心いそ〳〵野の道をゆく。
よくはづむゴムまりの如輕やかの心抱きて野の道をゆく。
しばらくは足にまかせて歩みけり春の日中の人の戀しき。
ひた〳〵とふなべりたゝく水にさへ心うれしむ春の大川。
時々は白波たてゝ大河を行德行きの川蒸汽過ぐ。

港

一、二　A.　B.　C

うす青き夜のさぎりのみなぎれる港にひくゝ汽笛さびしも。
ひたひたと潮のぬらす棧橋を友ひとりおきて舟ははなるゝ。

旅行

灯の赤き人形店に妹らのみやげかふさへ旅はうれしき。
白たびのうすよごれたるそれにだに旅の愁のわく夕かな。
旅に來てきゝおぼえたる京言葉友への文にかく夕かな。
うち見やるゆふべ増毛の山々の薄紫も憂しや船旅。
いつまでかつゞかん旅は今日もまた入日の野路をたどりつゝゆく。
黒川のほとに來れば我が涙つひに流れし初旅の日よ。
冷かに潮風の吹く砂山に濤の音きく旅の夕ぐれ。

夕やみの旅の磯べに立ちて見つ波に映らふ蜑の藻屑火。
尙遠き旅路なりせば赤みゆく野火のけぶりも嬉しかりけり。
函館は野暮れ山暮れ海くれぬ大船の灯も旅なれば憂し。

母

夕されば旅出せし子のうはさをばし給ふ母の御姿思ふ。
病める子を持つ母のごとたび〳〵にとまる時計を悲しみてみる。
青き藻に金魚はなちぬ母親は目さむる子等の笑顔みんとて。
いねし子に母がつりたる蚊帳のごと朝つゆに町つゝまれてゐぬ。

霧

何となく心たらはで出てゝ見ぬ河霧紅き河岸の夕を。
こき霧のあさをよろこびわが友と刈田はせにし昔こひしも。
霧深き木の間に一つ街燈の光のこれるあさの靜けさ。
ほの白きさ霧の路を旅ゆけば灯影もしめる里の家々。

いたゞきは霧にかくれてほの青う麓あけゆく大比叡の山。

初冬

初冬の午後の光のうす〳〵と窓の硝子にうつるさびしさ。
冬はきぬまばらになれる森の上に高くはなれて月ぞさへたる。

夕ぐれ

夕まくれ妹よりの書と文字と半ばなかばの文よみし窓。
そひねして小さき乳を妹にふくます夜半の木枯の聲。
かゝる朝妹生れ死に行きぬ青葉若葉の日に光る朝。
夕やみの川にしら〳〵川あかり光れば里に旅籠もとむる。
ふとみれば時計の針がとまりをりかなしき事のおこりもやする。
街道の梅雨の夜はよし金色の灯かげの浮ぶいさゝかの水。
夕かせにメリンスの袖かろ〳〵となびかせて見る涼しきこゝろ。
紫の富士を見んとて夕さればうらの砂山戀ふわれなりし。
白きもや港をとぢて川口のみをのしるしもみえぬ夜半かな。